

京都大学	博士（文学）	氏名	高橋 佑宜
論文題目	<b>A Descriptive Study of Word Order Patterns in Old English Prose Texts</b> （古英語散文テキストにおける語順パターンの記述的研究）		
<p>（論文内容の要旨）</p> <p>英語史上において、古英語は特に多様な語順を用いていた。現代英語はSVO（主語-動詞-目的語）型の言語である一方で、古英語はSVO型とSOV（主語-目的語-動詞）型の両方の特徴を有していた。英語の語順を巡っては、近年、統語論と情報構造の視点から研究手法に関する理論化と精緻化が推し進められている。また、それと並行して、歴史語用論が言語変化を捉える経験主義的な基盤として注目されつつある。同時に、経験主義的な基盤に対して、説明妥当性を与えるコーパス言語学といった定量的な分析や記述を行う手法が英語史分野にも定着して久しい。本論文はこうした方法論を援用し、古英語における語順パターンについて実証的に記述、分析することを目的とする。</p> <p>本論文は7章から構成される。以下、各章の要旨を述べる。第1章では、本論文の研究背景、研究目的を述べた後、本論文における研究課題を提示する。本論文は、1) 多種多様な古英語の語順をどのように定義・分類するのが妥当か、2) 主節、従属節、結合節の間において、語順パターンの分布にどのような差異が見られるのか、3) 主語の情報構造上の性質は各語順パターンにおいてどのような傾向を示しているのか、4) 主語や動詞句といった節の構成要素の分布と語順パターンはどのように関連しているのか、5) 特定の語順パターンが何らかの語用論的な機能や談話上の効果を備えているのか、といった点について議論・分析する。次に、調査対象であるテキストについて説明を行う。本論文は古英語コーパス<i>The York-Toronto-Helsinki Parsed Corpus of Old English Prose</i> (YCOE)に収録されているテキストの中から異なる3つのジャンル、合計5つのテキストを調査対象とする。年代記から<i>Anglo-Saxon Chronicle</i>のA写本、聖人伝から<i>Old English Martyrology</i>及び<i>The Life of St Margaret</i>のCambridge Corpus Christi College 303版とCotton Tiberius版、説教から<i>Blickling Homilies</i>を調査対象とし、各テキストに関する書誌情報や言語的背景に関する説明を行う。そして、章の最後には本論文の構成を述べる。</p> <p>第2章では、本論文に関連する範囲で古英語の語順についての先行研究の検討を行う。まず、語順についての類型論、古英語の基本語順に関する議論の検討から始め、古英語の語順に関する記述的研究を検討する。次に20世紀後半に行われた古英語散文の語順についての分析の枠組みについて批判的な検討を行う。それを踏まえて、近年の古英語語順の研究に言及しながら、古英語において特徴的な振る舞いをするとしてきた等位接続詞<i>ond</i> ‘and’で始まる節が語順に及ぼす影響について検討を行う。そして、21世紀に入ってから古英語の語順研究にも本格的に取り入れられたコーパス言語学や統計的な手法、そして言語理論の発達成果に関して検討を行う。とりわけ、古英語におけるV2語順（動詞第二位語順）をめぐる議論を批判的に検討し、古英語にお</p>			

るXVS語順とXSV語順の統語構造の差異と発生のメカニズムについての議論を整理する。あわせて、語順を構成する要素の決定方法に関わる接辞化仮説 (cliticization hypothesis) に関する批判的検討を行う。また、古英語の語順の選択にも語用論的要因や情報構造が深く関与しているとされる点についても再検討を行う。このような先行研究の検討を通じて、近年行われてきた古英語から中英語の語順変化に関する定量的な記述的分析を見直し、本論文の分析に用いる語順パターンの枠組みを示す。そして、第2章の後半では、古英語の語順分析に対する歴史語用論的アプローチの導入を行う。言語使用に対する機能主義的な見地、前景化・背景化の区別、語用論標識 (談話標識) としての等位接続詞 *ond* 'and' と副詞 *þa* 'then' の性質、情報構造に関する理論的背景、主節と従属節の非対称性について概観する。最後に、ラテン語からの翻訳が古英語へ及ぼす影響についても言及する。

第3章では、記述的分析の枠組みを提示する。まず、コーパスに含まれている調査対象テキストからのデータを収集する方法について説明する。続いて、分析上生じる諸問題を述べた上で、解決策について検討を行う。具体的には、写本と校訂版の言語の扱い方、直接話法の性質、接辞としての否定辞 *ne* の扱い、相関構文、非人称構文について検討する。そして、本論文の分析で扱う用例の分類方法を提示する。1つ目に、節タイプは主節と従属節に加えて結合節 (conjoined clause) を含めた3種類に区別する。下位区分として、先行研究で指摘されている古英語の特異性を踏まえて、主節は等位節 (conjunct clause) と非等位節 (non-conjunct clause) に区別する。従属節は名詞節、関係節、副詞節の3種類に区別する。2つ目に、語順パターンは合計12種類に区別する。結合節は等位接続詞によって他の節に結びついており、主語が省略されている節と定義する。主節と従属節においてはSVX、XVS、XSV、SXV、SXVX、VSX/VXS、XXVS、SVXVの8種類に分類する (Sは主語、Vは動詞、Xはその他の構成素を示す)。結合節においては、(S)VX、(S)XV、(S)XVX、(S)VXVの4種類に分類する (括弧付きのSは主語の省略を示す)。3つ目に、主語、動詞句、節の構成素に関する分析の枠組みを提示する。まず、主語の取り扱いについて、先行研究で取り入れられている情報の既知性に関する分析方法を検討した上で、古英語の分析にも応用可能な主語の話題性 (情報の既知性) と言語形式の結び付きに着目した階層的な分類を提案する。具体的には、主語の意味論・語用論的な性質を踏まえて、より話題性が高い方から順に、1) ゼロ照応 (ゼロ代名詞)、2) 人称代名詞・指示代名詞、3) 定名詞句・固有名詞、4) 不定名詞句の4つの階層に区別する。次に、動詞句の取り扱いについて、古英語語順の分析を念頭に、単独動詞句 (下位区分として8種類) と複合動詞句 (下位区分として11種類) の2種類に大別する。最後に、主語と動詞句を除く、節の構成素の分類方法を提示する。節の構成素は、代名詞の目的語、名詞句の目的語、前置詞句、副詞的名詞句、主格補語、付加詞、不定詞節、小節といった分類に加えて、XVS語順と密接な関わりのある *þa* と *þonne* を一般的な副詞とは区別して取り扱う。さらに、一般的な副詞句の中でもXVS語順とXSV語順に一定の関連性があると指摘されている副詞群 (*nu*, *swa*, *þær*, *þus*, *sibþan*, *her*, *forþam*, *eac*, *eft*, *sona*,

witodlice, soblice, efne) も個々の語順パターンの分析の際に区別して取り扱う。

第4章では、前章において議論・提示した分析の枠組みに基づいて、*Anglo-Saxon Chronicle*、*Old English Martyrology*、*Blickling Homilies*の3テキストに生起する語順パターンについて包括的な分析を行う。具体的には、各語順パターンについて、節タイプ、主語の種類、動詞句の種類、OV語順・VO語順の使用、目的語や節の構成素の種類を記述した上で、結果を分析・比較しながら語順パターン間の差異について考察する。調査対象となる節は全体で6,036例が得られた。そのうち、56.7%が主節、30.8%が従属節、12.5%が結合節という結果を示した。各テキストにおける従属節の割合を比較すると、*Anglo-Saxon Chronicle*が19.0%、*Old English Martyrology*が29.4%、*Blickling Homilies*が44.7%を示していることから、テキストの年代と古英語散文の発達の関わりを示唆した。さらに、主節の下位区分である等位節・非等位節、従属節の下位区分である名詞節・関係節・副詞節についても同様に比較を行い、テキスト間の節タイプの分布の差異について考察した。次に、等位節と非等位節における語順パターンの生起状況の比較から、XVS語順、XSV語順、VSX語順は非等位節において好まれやすい傾向がある一方で、SXV語順は等位節において好まれやすい傾向があるという対照的な結果が得られた。あわせて、SVX語順とSXVX語順はどちらの節にも生起する結果となった。このことから、主節における節タイプ（等位節・非等位節）と語順パターンは密接に関係していることを量的な議論から明らかにした。引き続き、主節と従属節における語順パターンの生起状況の比較を行った。その結果、SVX語順はどちらの節にも30%から40%程度の割合で用いられていた。また、XVS語順とXSV語順は従属節にはほぼ生起せず、主節においてそれぞれ約30%と約25%程度使用されていることを示した。さらに、SXV語順とSXVX語順は主節においては10%未満である一方で、従属節においてはそれぞれ約40%、約20%を占めることを示した。このことから、主節と従属節の間には語順パターンの生起状況に対照的な差異が見られることを明らかにした。次に、各節タイプにおける語順パターン毎の主語の話題性の分布割合を比較しながら、語順パターンの持つ情報提示機能について議論した。特に、主節において高い話題性を持つ主語の割合が半数を上回るのはSVX語順、SXV語順、SXVX語順である一方で、XSV語順は40%程度、XVS語順に至っては23%程度であることを明らかにした。この定量的な結果を基に、語順パターンと主語の既知性には相関性があると論じた。さらに、従属節における主語の話題性の分布状況は、語順パターンにかかわらず高い話題性を持つ主語が約80%以上を占めていることから、従属節は既知情報を提示する際に用いられることが大半であることを明らかにした。続いて、節タイプと語順パターン毎における動詞句の分布状況について分析を行った。全ての節タイプ（主節、従属節、結合節）に共通する傾向として、動詞句の大半は単独動詞句であり、複合動詞句は *beon/wesan* + 過去分詞で構成される場合を除いて、ごくわずかであることを指摘した。その次に、各節タイプと語順パターン毎にOV/VO語順の割合を調査した。その結果、OV語順の全体的な割合は非等位節（17.7%）、等位節（31.6%）、結合節（47.9%）、従属節（52.2%）の順に増加する

ことを明らかにした上で、節タイプの性質とOV語順の間における関連性について論じた。最後に、各語順パターンにおける節タイプ毎の構成素に関する詳細な記述を行った。語順パターン毎の動詞前・動詞後の生起位置を含めた記述の結果を比較することで、動詞前・動詞後における節の構成素の生起状況は語順パターンを問わず同様の割合で減少していく傾向があることを量的な観点から明らかにした。

第5章では、中世イングランドにおいて広く信仰されていた聖マルガリタの殉教伝である *The Life of St Margaret* について現存している2つの異なる古英語版 (Cambridge Corpus Christi College 303版と Cotton Tiberius版) のテキストにおける語順パターンに関する実証的な比較調査を行った。その結果、従来はどちらも後期古英語とされていたが Cambridge Corpus Christi College 303版は古英語らしい語順を保っている一方で、Cotton Tiberius版は初期中英語の萌芽が認められると主張した。また、語順の差異は統語論的な要因だけではなく語用論的な要因にも基づいていることを明らかにした。

第6章では、*Old English Martyrology* における談話の展開と語順の相互関係に関する考察を行った。*Old English Martyrology* に収録されている殉教エピソードを取り上げて、それらには共通する5つのパートが見られることを指摘した。そして、各パートには殉教エピソードの叙述内容と連携する形で、一定の語順パターンが定型的に使用されていることを明らかにした。その上で、定型化された語順パターンの使用は、これまでの章で論じられてきた節レベルでの機能を超えて、殉教エピソードという談話レベルにおいても機能を担っていると論じた。語順という観点から定型性を統語レベルに限定せずに談話レベルで分析することで、談話単位が殉教エピソードを物語るための雛形として慣習化していたと結論づけた。

第7章では、各章並びに全体の要約を提示し、本論文の結論を述べた。古英語の語順パターンの統語環境のみならず語用論的な観点を取り入れた分析を行うことで、包括的な記述を行った点について論旨をまとめた。また、節単位の分析に留まらず、談話単位での語順パターンの慣習化を記述したことによる貢献について述べた。

(論文審査の結果の要旨)

本論文は、古英語の統語論において最も研究の蓄積が多いテーマの一つである語順を取り上げ、20世紀後半以降に拡充してきたコーパス言語学・歴史語用論の方法論を利用して、実証的な事実の確認とそれについての新たな解釈を提示するものである。論文の主要部分の前後には、論文の概略を示した第1章、先行研究を精査した第2章、研究方法を記述した第3章、全体を総括した第7章も含まれるが、以下では、これまでの研究を大きく進展させる学術的貢献を行った第4章～第6章（主要部分）を中心に、その評価を行う。

古英語の語順は現代英語とは異なり、主節では定動詞が節の2番目の位置に現れやすいこと、従属節では定動詞が節の末尾に現れやすいことが特徴的で、これらの現象を分析した先行研究は少なくない。一方で、古英語に特徴的なこのような語順も常に起こるわけではなく、現代英語と同様の語順も含めて多様な語順が観察できることも知られている。先行研究ではこれらの多様な語順については、古英語の語順は自由である、という記述にとどまる場合が少なくなかった。主格、属格、与格、対格の屈折語尾が比較的良好に残っている古英語では、その語順が確かに現代英語よりも自由ではあるが、そのあり方には一定の傾向があり、これを明らかにする意義は大きい。

本論文は、*The York-Toronto-Helsinki Parsed Corpus of Old English Prose*の中から抽出した文献について詳細な計量的分析を行い、その語順を決定づける要因として、語用論的な情報構造が関係していることを示す。議論の中心となる第4章では、年代記から*Anglo-Saxon Chronicle*のA写本、聖人伝から*Old English Martyrology*、説教から*Blickling Homilies*を取り上げ、ここから抽出した6,000以上の例文を異なる語順に分類する。その際に、主節と従属節という単純な区分にとどまるのではなく、節のタイプの区分に工夫を加えたことが大きな学術的貢献につながったものと考えられる。本論文では、主節をさらに等位節（‘and’等の等位接続詞に導かれた節）と非等位節（接続詞を伴わない節）に分類し、さらにこれまでの古英語の語順研究では分析の対象から外れることが多かった結合節（主語が省略された節）の語順にも対象を広げた。これらの異なる節においてどのような語順が生起し、その背景にどのような言語的要因が関与しているかを主語の性質、動詞句の性質、語順に影響を与える節内の要素のタイプ、等の視点から網羅的に分析した第4章は、いわば古英語の語順についての記述に徹した章とも言える。その語順の傾向には「結合節および従属節→等位節→非等位節」というような段階性があることを示し、この順序に話題性の高さが関係していることを指摘した意義は大きい。特に注目したいのは、名詞句を話題性が高いゼロ照応から話題性の低い不定名詞句まで4階層に分類し、この生起頻度が、結合節、従属節、等位節、非等位節における語順のあり方と連動していることを示した点である。語順の型の決定に、情報構造としての話題性が大きく関与していることを具体的なデータとともに示した重要な貢献である。

この基礎的研究に続く第5章と第6章では、以上の視点を具体的な文献の分析にどの

ように活用することができるかを示した応用的な事例研究である。第5章では *The Life of St Margaret* の Cambridge Corpus Christi College 303写本と Cotton Tiberius写本の比較を行い、同一テキストの二つの写本の語順に注目すべき違いがあること、すなわち Cotton Tiberius写本では中英語の語順の萌芽が見られることを明らかにする。まず全般的な傾向として、Corpus Christi College写本では Cotton Tiberius写本よりも動詞が節の末尾に来る語順が多く、より古英語的である点を指摘する。さらに、古英語では語順の型を決定するにあたり重要な役割を果たした節の冒頭の‘and’等の等位接続詞がCotton Tiberiusではほとんど機能しなくなっていると指摘する。いずれも、英語の語順が新たな段階を迎えたことを示す重要な気づきであると言える。

さらに第6章では、*Old English Martyrology*に収録されている殉教エピソードを個別に取り上げ、そのテキストの構成を語順の視点から分析する。殉教エピソードに場面の設定や祈り、殉教の場面、コーダなど一定の展開があることは知られているが、それぞれの段階でどのような語順の型が起こるかを分析し、それを情報構造の視点から解釈した点が新しい。節の枠組みを離れてエピソード全体に議論を拡大しながら、同時に本論文の主要な論点である語順と情報構造の関係についての考察が十分に生かされていると言える。

このように本論文は、コーパス言語学の計量的手法を利用すると同時に、一つ一つの節の中で語順が情報構造との関係でどのように効果的に選択されているかといった細部にも注意を払うことで、これまで多くの研究者が取り組んできた古英語の語順について、現代的な解釈の可能性を示した。この点を高く評価することができる。ただし、今後の課題となる部分も皆無とは言えない。古英語の語順を網羅的に記述した第4章は、全体としては語順と情報構造の関係性を十分に明らかにすることができたと言えるが、個別の構文の詳細を扱う部分では、解釈が与えられないまま頻度のみが提示される場面もあった。さらなる議論の踏み込みが期待される場所である。同様に、異なる語順ごとにどのような要素（たとえば副詞）が起こるかを示す場面では、語順とは別に、そもそもその要素が古英語において高頻度であるのか低頻度であるのかといった要素自体の性質の精査も必要であろう。このような周辺部分への配慮が若干足りないと思われるところもあった。しかし、これらは今後の研究の可能性を示すものであり、本論文の価値を損なうものではない。

以上、審査したところにより、本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。2022年9月2日、調査委員3名が論文内容とそれに関連した事柄について口頭試問を行った結果、合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規程第14条第2項に該当するものと判断し、公表に際しては、当分の間、当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。